身体を介して世界とかかわる子どもたち

砂上　史子

児童文学と実証研究とは性質を異にするものですが、しかし、ふと研究者としての自分の立ち位置や進むべき道を確認させてくれる本があります。それは、『あなはほるもの　おっこちるとこ』(クラウス文センダック絵　わたなべしげお訳　岩波書店)です。この本は、副題に「ちいっちゃい　こどもたちのせつめい」とあるように、幼稚園や保育園の子どもたちによる、自分の体、動物、自然物、遊具など、身の周りの事物についての説明を集めた本です。

いぬは　ひとを　なめる　どうぶつ
ては　ぼくに　やらせてと　うえに　あげるため にあるの
ケーキの　かすを　ゆかに　おとさないように
ひざが　ついているんだよ
えんちょうせんせいは　とげを　ぬいてくれる
ひと

このような子どもたちによる説明が、ページをめくるごとに、センダックの描く表情豊かな子どもた

ちの姿とともにいきいきと飛び込んできます。センダックは『かいじゅうたちのいるところ』などで知られる有名な絵本作家です。子どもたちの言葉に添えた彼の挿絵の素晴らしさが、この本の成功の一因であることはいうまでもありません。センダックの絵には誇張はあっても嘘がなく、ページのなかを縦横無尽に駆け回る子どもたちの姿には「子どもであること」の幸福感があふれています。

そうしたセンダックの挿絵とあいまって、子どもたちのユーモラスな説明は、非常に「子どもらしい」ものであるともいえます。では、その「子どもらしさ」とは一体何なのでしょうか。少し立ち止まって考えてみると、それはさまざまな幼児に関する研究で指摘されている事柄に通じるものであることがわかります。

先に例に挙げた子どもたちの説明で特徴的なのは、説明される事物の特徴が、基本的に子どもたち自身と事物とのかかわりのなかでとらえられたものであることです。犬に顔をなめられたり、先生に「僕がやりたい」と手を挙げたり、ケーキをほおばりながら膝でケーキのかすを受けとめたり……といった、子どもたちの日常生活での経験が直接的に反映されています。そして、そのかかわりは常に具体的であり、身体的であるのです。

本のページのなかを自由自在に動き回る子どもたちの様子からは、子どもにとっての具体的で身体を介した事物とのかかわりこそが、子どもたちが周囲の世界を理解していく原点であることがひしひしと伝わってきます。それは周囲の世界を百科事典のように整然と配列して理解することではなく、世界を子どもの視点で彩りと手ごたえのあるものとして意味づけていくことなのだと思います。たとえば、幼稚園や保育園の砂場で砂遊びをしている子どもたちは、同じことの繰り返しであるように見えて、ス

コップで砂をすくうこと、掘った穴に水を流すこと、カップに詰めた砂をお皿に盛ることの一つひとつの行為を飽きることなく続けます。そうした子どもたちが、当たり前のように行っている具体的な対象とのかかわりの豊かさにこの本は改めて気づかせてくれます。ちょうどこの本のなかにも、本のタイトルにもある「穴」をはじめ、砂遊びや土遊びをめぐる説明がたくさん出てきます。

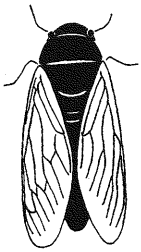
あなの　なかに　なにか　かくすことも　できるよ

どろんこは　とびこんで　すべりこんで　おっころりんの　しゃんしゃんて　やるところ

おっころりんの　しゃーん　しゃん！

おしろは　すなばで　つくるもの

もちろん、穴の特性は「ほるもの」だけではありません。しかし、このような穴や砂というものとの多様なかかわりを経験することによって、子どもたちは穴や砂というものを「知る」のでしょう。このことは、まさに保育のなかで子どもたちが「遊び」を通して学ぶということにつながります。このことが子どもたちの生の声によって、見事にして簡潔に表現されていることが、この本がもたらす驚きと魅力なのだと思います。



さて、この本はジャンルとしては「絵本」「児童文学」に分類されるものです。今回、この本のページをめくりながら、幼い子どもたちが生きるありようをいきいきと伝えることを、常に頭の隅に置きながら考察し記述する研究者でありたいと、改めて強く思いました。

実際、日々の生活を子どもとともにする保育実践の研究は最も子どもに近いところにあり、具体的な事例を通して、いきいきと子どもたちの姿を伝える

ことと実証性とを両立させている保育研究も少なくありません。そのような研究としては、子どもの探索活動やごっこ遊びに関する今井和子先生の研究（一九九〇，一九九二）や子どもの笑いに関する友定啓子先生の研究（一九九三）などが思い浮かびます。

そうした子どもの目線に寄りそうようにして世界を眺め、子どもたちのささやかな行為のなかの豊かな意味を発見していくことは、子どもたちの傍らで観察を行い、そこで見られた姿を積み重ねていくことを自身の研究手法としている私にとって、自分の研究者としてのアイデンティティの核となる重要な仕事ではないかと、最近よりいっそう強く感じるようになってきました。保育のなかで思わず「ふふふ」と先生方と顔を見合わせて笑ってしまう子どもの姿や、あとから振り返って考えたときにみえてくる大人が思う以上に深い子どもの行動の理由などを含んだ、保育実践の「厚み」を伝えられるような記述をめざすことが、私のライフワークのひとつとなる予感がします。

その意味で、今回紹介した『あなはほるものおっこちるとこ』は、絵本の名作であることを超えて、私にとって、自分の研究がいかなるところをめざしているのかを、思い出させてくれる重要な本でもあります。

（千葉大学）

文献

モーリス・センダック『かいじゅうたちのいるところ』冨山房　一九七五
今井和子『自我の育ちと探索活動』ひとなる書房一九九〇
今井和子『なぜごっこ遊び』フレーベル館　一九九二
友定啓子『幼児の笑いと発達』勁草書房　一九九三